地歴公民（世界史）　東京大学　（前期）　1/2

＜全体分析＞

試験時間　２科目で 150 分

解答形式

（第１問）論述式　（第２問）論述式・記述式　（第３問）記述式

分量･難易（前年比較）

分量（減少･やや減少・変化なし･やや増加・増加）

難易（易化･やや易化・変化なし･やや難化・難化）

第１問は、昨年度と同様に 20 行であった。地図Ⅰ、地図Ⅱでそれぞれ南北アメリカ、ヨーロッパ、東アジアを扱っており、計６つの地図を考察する必要がある。地図を用いた出題としては、３つの時期について地図を比較・検討させた 1992 年度以来となる。2020 年度には３つの史料を読み取らせる出題形式がとられており、史料や地図・図版等の読み取りを要する出題としては３年ぶりとなる。第２問は、昨年度が４行論述が２題と２行論述が３題だったのに対して、３行論述が１題と２行論述が４題となった。第２問の総行数の推移は 2020 年度が 16 行、2021 年度が 13 行、2022 年度が 14 行、今年度は 11 行。それゆえ、例年よりはやや行数が少ないものの、第１問で地図を踏まえた考察にやや時間を要すると考えられるため、全体として受験生の時間的な負担はそこまで変わらないだろう。第３問は従来通り設問 10 問であった。４年連続で解答数は 10 個、５年連続で１行論述は出題されなかった。

出題の特徴

第１問は 1770 年前後から 1920 年前後までの約 150 年間の時期に、ヨーロッパ、南北アメリカ、東アジアにおいて、諸国で政治のしくみがどのように変わったか、およびどのような政体の独立国が誕生したかを 20 行（600 字）以内で記述させる問題であった。2019 年度（22 行）を除いて、近年は 20 行での出題が続いている。指定語句は 2020 年度の６つ（３つの史料を扱うことが求められているため、実質的には９つともいえる）、2021 年度の７つに対し、2022 年度と同様に８つであった。第２問は、問⑴で「湖広熟すれば天下足る」ということわざの背景にある経済の発展と変化、問⑵でマムルーク、パルティアの文化的変容、問⑶で前近代におけるナイル川の農業、カーリミー商人などが問われた。第３問については、2018 年度に図版・地図・史料を用いた出題がなされたが、今年度については例年通りシンプルな出題形式が踏襲された。

その他トピックス

第１問、第２問、第３問ともに、定番となっている出題形式が踏襲された。第１問はヨーロッパ、南北アメリカ、東アジアにおける政治のしくみの変化や、どのような政体の独立国が誕生したかというテーマ。地図Ⅰ、地図Ⅱの地図を踏まえつつ、題意に沿って論を組み立てる必要がある。第２問では前近代の長江流域、ティグリス川流域、ナイル川流域に関連した出題がなされた。おそらく、第１問が近現代についての出題だったことから、前近代中心となったのだろう。第３問は例年通り平易であり、最低でも１問ミスまでにとどめたい。

第２問の問⑴(b)は、大学受験科における完全習得タイムの演習問題とほぼ同一であるほか、問⑵(b)は、「高３東大世界史」のテキストで扱った問題（2012 年度東大第２問）と同様であり、ズバリ的中であった。また、第１問のテーマと関連したものとして、冬期講習の「東大世界史」第４講ではアメリカ独立革命から 20 世紀初頭までの憲法や立憲制をめぐる動きを扱った。第２問の問⑶(b)のカーリミー商人については、第１回東大入試オープンの第１問で紅海の歴史をとりあげ、指定語句として「カーリミー商人」を用いさせている。これらの学習は解答に際して役に立っただろう。しかしながら、合格点に達するためには、日々の真摯な学習が何より重要なことは言うまでもない。

© 河合塾　2023 年

地歴公民（世界史）　東京大学　（前期）　2/2

＜大問分析＞

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
第１問	論述	ヨーロッパ、南北アメリカ、東アジアにおける政治的変化（1770 年前後～1920 年前後）	問題文の「植民地が独立して国家をつくった」や地図Ⅰ・地図Ⅱの読み取りや指定語句の「シモン＝ボリバル」から南北アメリカの独立を想起し、多くの共和政体（ブラジルは帝政）をとる立憲国家が成立したことを指摘する。そして、ウィーン体制を構成したのが君主政体をとる国家だったこと、二月革命でフランスが共和政になったほか、立憲国家をめざす動きが起こったこと、19 世紀後半には東アジアでも立憲国家移行の動きが広がったことを指摘してほしい。また、問題文の「議会にどこまで権力を与えるか、国民の政治参加をどの範囲まで認めるか」を踏まえ、ドイツ帝国の帝国議会では男性普通選挙がとられる一方で、議会の権限は弱い外見的立憲主義だったという趣旨を指摘したい。第一次世界大戦については、革命が起こったロシアや、敗戦国のオーストリアで多民族国家が解体し、多くの新興国家で共和政（ユーゴスラヴィアは君主政）が成立したこと、それらの国々がヴェルサイユ体制を構成したことを示したい。その上で、女性参政権の拡大についても言及しよう。1992 年度第１問、1997 年度第１問と関連するテーマであるが、過去問の解答に引きずられずに題意に即して論点を組み立てないと、本問の要求から外れてしまうので気をつけたい。	標準
第２問	論述 記述	都市や文明の発展、文化や経済の交流における河川の役割（古代～中世）	問⑴(a)呉の都とあるので、建業が解答となる。問⑵(c)クテシフォンを建設したのはパルティア。ササン朝ペルシアと間違えないこと。「言語面を中心に」とあるので、ギリシア語とペルシア語（アラム語も許容されるだろう）を指摘しつつ、ヘレニズムの影響が薄れていくことを示したい。問⑶の地図はＡがアスワン、Ｂがアレクサンドリア、Ｃがアデンである。	標準
第３問	記述	病気と医学（古代～現代）	問⑸の「コッホ」、問⑽の「陰陽家」が少し難しいが、全問正解をめざしたい。	やや易

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

第１問は、題意を踏まえていかに歴史的な文章を構成できるかが問われるので、論述力を日々研鑽することが大事となる。第２問は基本的な問題が中心だが、要点を的確に指摘できるように内容の理解を深めておかないと高得点は望めない。第３問は平易だが、第１問・第２問との時間配分にも留意しなければならない。基本知識をしっかり習得した上で、第１問の大論述だけでなく、第２問の短い論述に対しても十分な準備・対策が必要である。年度ごとに出題形式・字数など若干の違いはみられるが、本質的な学力を求められている点では変わらない。時間軸・空間軸に沿って大局的に歴史をとらえることを心がけよう。

© 河合塾　2023 年